

加瀬みきの ワシントン発 グローバル随想



イラスト・題字：長峯亜里

第26回

宇宙開発の「夢」

昨年9月アメリカ議会が民間人に授ける最高の荣誉である議会名誉黄金勲章がキャサリン・ジョンソン(故人)、ドロシー・ヴォーン(故人)、メアリー・ジャクソン(故人)、クリスティン・ダルデンに授与された。ソ連との宇宙開発競争の真っ最中、アメリカ初の有人地球周回軌道飛行成功など、アメリカの宇宙開発に欠かせなかった数学者やエンジニアであったにもかかわらず、その業績に光が当たらなかった黒人女性たちである。

身近になった宇宙

同じく昨年7月、アメリカは人類初の月面着陸55周年を祝った。1969年の第1回以降1972年12月まで計6回のミッションで12人の宇宙飛行士が月面に降り立った。長期間宇宙に滞在し、様々な実験や観測を行うために宇宙ステーションもつくられた。ソ連(当時)やアメリカが競って飛ばしたが、今は多国間の協力のもと国際宇宙ステーションが地球の衛星軌道上を回り、地球や天文観察から新薬開発まで様々な実験や研究が行われている。

日本人の宇宙飛行士も珍しくなくなった。若田光一さんや野口聡一さんなどこれまでに12人が宇宙に飛び、宇宙ステーション滞在中の飛行士と会話を交わすことも当たり前になった。

民間の宇宙飛行会社も創設され、昨年には民間人の初の宇宙遊泳も実現した。

とは言っても衛星を打ち上げたり、ミサイルを飛ばすのも難しいが、ましてや人が地球を離れ宇宙に行くのは深刻なリスクを伴う。スペースシャトル「チャレンジャー」の打ち上げ後わずか73秒での爆発、ソユーズ11号の空気漏れなど、死亡事故も起きている。

アメリカ航空宇宙局(NASA)の2人の飛行士が国際宇宙ステーションで足止めされている(2024年12月現在)。2人を乗せ地球と宇宙ステーションを往復するはずであったボーイング社の宇宙船スターライナーに不備が生じ、2人を乗せての帰還を断念したためである。民間企業スペースXが2月にでも飛ばす宇宙船で地球に戻る予定である。

夢に隠された闘い

月面着陸への道は1961年5月のケネディ大統領の議会演説で始まった。当初の反応は冷たかったが、大統領は翌年ライス大学で「我々は月に行くことを選択する」と宇宙探検でアメリカの開拓者精神を呼び起こし、アメリカこそが技術革新を善のために主導すると若者を奮い立たせる演説をし、月への夢は支持を広め、アポロ計画が本格化した。